慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	K・エンクルマ著 『アフリカにおける階級闘争』
Sub Title	K. Nkrumah, Class struggle in Africa
Author	小田, 英郎(Oda, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1972
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.45, No.1 (1972. 1) ,p.155- 159
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19720115-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

闘争に汚されていないアメリカ人の眼がとらえた新中国像であるがゆえに、今後の米中関係のゆくえを考える上でも大きな価値をもとう。紙幅があればもつと詳細に検討すべき充実した論文である。

以上、本書の紹介と批評を試みてきたが、一読して、重厚感のある内容と多様な角度からのアメリカ対外政策の分析に、いささか疲労感をおぼえるほどであつた。アメリカ外交が異常な関心を集めている昨今、本書はその本格的な理解のために大いに益する書物である。地域研究グループという集団的接近法が成功をおさめた一例としても、貴重な業績であるといつてよい。

（鹿島研究所出版会刊、A5判・四七四頁、一九〇〇円）

（神谷不二）

Kwame Nkrumah,
Class Struggle in Africa
New York: International Publishers, 1970, 96 pp.

K・エンクルマ著
『アフリカにおける階級闘争』

本書は、独立期アフリカの代表的な政治指導者クワメ・エンクルマの手になる階級論である。エンクルマが戦後パン・アフリカニズムの理論的指導者でもあつたことは、誰でも知つていよう。そしてまた、エンクルマが、ベトナム和平のためにハノイを訪問する途上、一九六六年二月二十四日のクーデターで権力の座を追われ、その後は友邦ギニアに身を寄せて、自身の復権とその独自の「アフリカ革命」のために活動中であることも、広く知られていよう。

エンクルマの特徴のひとつは、おなじ独立期アフリカの政治指導者のうちでも、きわだつて理論志向性が強いという点にある。これは、かれの数多くの著述のなかでも、とりわけ *Consciencism* (1963) および *Neo-Colonialism: The Last Stage of Imperialism* (1965)（家正治・松井芳郎共訳『新植民地主義――帝国主義の最終段階――』・理論

社刊）の二著にはつきりとあらわれている。こうした顕著な理論志向性のゆえにかれの思想は「エンクルマイズム」と称せられているくらいであるが、その内容は「イズム」と呼ばれるほど体系的ではないように思われる。結局、エンクルマの思想は、論理を超えた一種の政治的宗教だつたのであり、むしろそのゆえにこそ、植民地から独立国への転換という熱狂的な時代のアフリカで、それなりの存在理由をもちえたのであろう（なおこの点については、拙稿「政治的宗教としてのエンクルマイズム」・『歴史学研究』・三七八号・一九七一年十一月を参照されたい）。

したがつて、エンクルマの主張には、論理的に若干の矛盾があつても別段不思議ではないが、それにしてもここに紹介する『アフリカにおける階級闘争』は、一〇〇頁足らずの小冊子ながら、いくつかの点でこれまでのエンクルマの主張を修正したかに思わせるほどの問題性をもつている。はたしてエンクルマイズムは変つたのであろうか。こうした問題を頭に置いて、以下本書の内容に触れてみよう。

本書の構成はつぎのごとくである。

序　論
一、アフリカにおける階級の起源
二、階級概念
三、階級的特性とイデオロギー
四、階級と人種
五、エリート主義
六、知識階級と知識人
七、軍・警察における反動派
八、クーデター
九、ブルジョアジー
十、プロレタリアート
十一、農民
十二、社会主義革命
結　論

エンクルマの情勢認識によると、現在のアフリカ大陸には抑圧と搾取を知らない地域はなく、またアフリカ革命の枠外にとどまつている地域は存在しない。そしてまた、いたるところで、アフリカ人民の目的の統一性が明確化してきており、ために、全面的解放、統一、社会主義といつたアフリカの革命的目標に対して、少なくとも言葉のうえで調子を合せなければ、アフリカ指導者は一人として生き残れないほどである。こうしたエンクルマの認識はいささか楽観的にすぎるが、そんなことにはおかまいなしに、かれはさらに、つぎのごとく論断する。すなわち、「こうした情勢のもとにあつて、革命の次なる決定的な段階、現在起りつつある武装闘争を強化し、拡大し、戦略・戦術的レベルでこれを効果的に整合し、同時に人民内部の少数反動分子の堡塁に対して決定的攻撃をくわえるべき段階の基礎が準備されつつある」。

エンクルマが、このように革命の決定的段階の到来を叫ぶのは、「うち続く反動的軍部クーデター」や内戦の勃発などがアフリカにおける階級闘争の本質と程度をドラマティックに露呈させ、それによつて「新植民地主義と土着のブルジョアジーの利害の一体性が明示された」からである。したがつて、「問題の核心は階級闘争である」とエンクルマは認識し、「アフリカには階級は存在しない」という「アフリカ社会主義者」の主張は、はなはだしい歪曲であつて、これほど真理からはずれているものはない、と論難する。そして、「アフリカ革命は世界社会主義革命の有機的な一部であり、ちようど階級闘争は世界の革命過程にとつて基本的なものであるのと同様に、アフリカの労働者・農民の闘争にとつても基本的なものである」と割りきるのである。

われわれ第三者の目から見ると、エンクルマのこうした割りきりかたは、やや意外である。たしかに、「アフリカに階級はない」というアフリカ社会主義者の主張は事実と相違しているにちがいないし、したがつてアフリカは階級闘争とは無縁の存在であるというかれらの主張も、理論的に成立しないであろう。しかし、アフリカにおける階級分化が著るしく遅れていることもまた事実であつて、エンクルマのように現段階におけるアフリカ問題の核心が階級闘争であるといいきるのは、極端である。それに、エンクルマはこれまでの著述ではある種の「アフリカ社会主義」に対して批判的ではあつたが、それでも社会主義のアフリカ的特殊性を認めていなかつたわけではない。たとえば、会議人民党十周年記念日（一九五九年六月十二日）の演説で、「党は規律をたもち、党の無敵ぶりをさらに強化するアフリカ的社会主義の思想によつてみちびかれ、武装されなければならない」（『自由のための自由』・一九六二年・理論社・一八六頁）と述べているのは、そのあらわれである。社会主義にかぎらず、あらゆる側面で「アフリカの個性」を強く主張してきたエンクルマが、本書のなかで普遍性への傾斜をとりわけ顕著に示したことは、驚くべきことである。

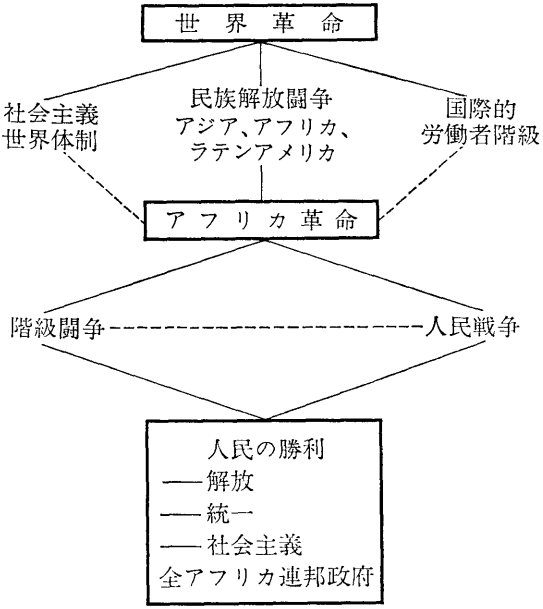
しかも、こうした驚きを予想してかどうか、「独立以前の時期においては民族的統一が存在するかに思われたし、全階級が植民地権力を追いだすべく力を合せていたため、現代アフリカ社会の階級分化が或る程度ぼやけて見えたのだ」と述べているのは、かえつてエンクルマの階級論を説得力のないものにしてしまつている。階級意識ならば主観的なものであるから情況の如何によつて鈍化もしようし尖鋭化もしようが、階級分化は客観的なものであつて、情況にかかわりなく存在するはずのものだからである。

ところで、本書のなかで展開されている階級理論は、その骨子において全くマルクス主義そのものであつてほとんど新味はない。いつてみれば、「エンクルマイズムの脱アフリカ化」を典型的に示したのが本書である。そこでは、原始共産制→奴隷制→封建制→資本主義→社会主義という歴史理論のうえにアフリカがどう乗るかが大筋として説明され、しかるのちに知識人の在り方が規定される。すなわち、「社会主義的、革命的知識人がアフリカの真に進歩的な政府のなかで役割をはたすにいたつている場合、通常それ

は、政治的信条としてのマルクス主義の採用、および共産主義政党その他類似の組織の形成によつておこなわれてきた……知識階級および知識人は、もしアフリカ革命のなかで役割をはたそうとするならば、アフリカにおける階級闘争を意識しなければならず、被抑圧大衆と一線に並ばなければならない……アフリカ革命のイデオロギーは、アフリカの労働者・農民の階級闘争と、世界の社会主義的革命運動、国際的社会主義とを結びつけるものである」。これほど直截なマルクス主義的主張は、かつてエンクルマの著述のなかには見られなかつた。その意味でエンクルマイズムは変つたといつていいように思う。

しかし、このようにマルクス主義への傾斜をいつそう顕著に示しつつも、これまでエンクルマイズムの中核をなしてきたパン・アフリカニズム＝統一アフリカ政府という目標はむろん放棄されていない。放棄されるどころか、むしろ積極的に追求されている。なぜなら、エンクルマの論理では、「アフリカの政治的統合と社会主義は同義のものだから」であり、「一方は他方なしには達成されえない」からである。もつとも、本書で展開された議論のコンテクストからいつて、目標の序列としては社会主義がアフリカの政治的統合より上位に置かれていると解すべきであろう。

ところで、アフリカ革命と世界革命の関連性をエンクルマはどう考えているか。エンクルマによれば、現代世界の革命過程は三つの主要な流れを結びつけたものである。すなわち、社会主義世界体制、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民の解放運動、および資本主義工業諸国の労働階級運動がそれであるが、このうちアジア、アフリカ、ラテンアメリカ地域の人民は、帝国主義、植民地主義、新植民地主義を経験した結果、社会主義の方向へ前進するうえで絶好の戦略的位置を占めている。なぜなら、かれらは、資本主義的「福祉国家」のワナや資本主義的堕落によつてその生産・分配過程があいまいになつているようなことがなく、問題を明確に見ることができるからである。そのために、現代世界の階級対立はこれら地



域に集中しており、したがつてこれら地域は、帝国主義に直接的かつ致命的打撃をあたえるべき世界革命の嵐の中心地域だというのである。

しかしながら、こうした論法はエンクルマ独特のものとは考えられない。たとえば、アジア、アフリカ、ラテンアメリカは世界の矛盾の焦点であり、帝国主義支配のもつとも弱い地域であり、帝国主義に直接の打撃をあたえている世界革命の嵐が吹きすさんでいる地域である、という「人民日報」社説(「アメリカ帝国主義に反対す界のすべての勢力は団結しよう」・一九六四年一月二十一日)の論調といかに類似していることであろうか。

総じて、本書はマルクス・レーニン主義の引き写しといつた印象をまぬがれない。もちろんそうした傾向はエンクルマの著述の多くに見てとることができるし、いまさらとりたてて問題にするまでもないかもしれない。しかし、そうした傾向が本書ほどはつきりでたケースは初めてである。もうひとつ意外な感じがするのは、これほど徹底した階級論を展開しているエンクルマであるのに、これ以前の著述では、ほとんどその片鱗も示していないことである。もともとマルクス主義に傾斜していたエンクルマであるから、階級について論じなかつたことの方が奇妙なのであるが、それにしても本書のごとき階級論の、その現われ方の突然さに驚かざるをえない。

概していえば、エンクルマは一九六六年二月のクーデターで権力の座を追われて以後、年を追つて急進化している。それ以後のかれの主張には一貫して武装闘争による社会主義革命といつた考え方が示されている。そしてその意味では、本書はかれのそうした主張を階級論の文脈のなかで再構成し、凝縮したものだ、といえるかもしれない。

(小田英郎)

に